

共立女子第二中学校

2025年度

入学試験問題（1回AM）

【 国 語 】

試験時間 50 分

【 注 意 】

- 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 2 問題は一～三で、全部で12ページです。試験中によごれや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生を呼んでください。
- 3 解答はすべて解答用紙にはっきりと記入し、解答用紙だけを提出してください。

一、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。(本文には一部改めたところがあります)

ずっと、「ジャンケン」について書きたいと思っていました。

始まりは、イギリスに留学した時です。授業で、課題発表の順番を巡^{めぐ}って、クラスがもめました。

なんとかしようと、騒^{さわ}いでるイギリス人相手に、「ロック・ペーパー・シザーズ(石・紙・はさみ)で決めたらどうだ？」と提案しました。

みんなは一瞬^{いっしゆん}、沈黙^{ちんもく}して、「それはなんだ？」となったので、ルールを説明しました。すると、説明を聞いたイギリス人達^{たち}は、「決定をそんな偶然^{ぐうぜん}に任したくない」と言い放ちました。

自分が何番目にやりたいかは、明確に主張することであって、「ロック・ペーパー・シザーズ」の偶然に任すべきではない、いや、シヨウ(僕^{ぼく}のことね)はそういう偶然に身を任せて平気なのか? とまで言われたのです。

僕はこの時、初めて、ジャンケンというものを意識しました。

① イギリス人をはじめとするヨーロッパ人は、ジャンケンをしらないのです。

ジャンケンをしなから、ちよつとのことで議論します。

簡単なゲームをする時も、誰^{だれ}が先にやるかを、必ず議論して決めます。

日本人なら、ほぼ100%、無条件でジャンケンが始まります。

僕は、日本各地でやっているワークシヨップで順番を決める時に、「じゃあ、誰からやる? 私からぜひやりたいって人はいる?」と議論から入る日本人を見たことがあります。特に、ペアの時は、間違^{まちが}いなくジャンケンです。【ア】

で、僕は「日本人の精神構造と、ジャンケンは密接なつながりがある」と考えるようになりました。

ヨーロッパ人は(アメリカ人もですが)子供の頃^{ころ}から、遊ぶ順番を議論で決めます。日本人は、ジャンケンで決めます。② ところが、その国民の考え方や感受性と無関係なわけがないのです。【イ】

だって、幼児の頃、ブランコに誰が最初に乗るかを決める時、議論で決めるということは、3歳^{さい}から対立を明確にするということ

です。弁舌がたつ子、説得力がある子、腕力で威圧する子が勝つという文化を生きるのです。【ウ】
③が、ジャンケンでブランコに乗る順番を決める文化には、「競争」も「対立」も「自己主張」も関係ないのです。
ただ、ジャンケンという偶然に身を任せていればいいのです。【エ】
根本的に、対立や主張とは無縁の文化の中で、子供は成長するのです。

(中略)

日本文化はジャンケンの文化だから、ジャンケンで日本文化を描きたいと僕は企みました。ジャンケンのルーツを探ろうと決め、親しい編集者には、そういう本を出したいから、ジャンケンについて資料を探して欲しいとお願いしていました。

ところが、ジャンケンの資料は、極端に少ないのです。いったい、いつから始まって、世界のどこで流通しているのか、正確で詳しい資料がないのです。それで、ずっとジャンケン本を出せないままでした。

A、今月(2005年4月)、『ジャンケン文明論』(李御寧、新潮文庫)が出ました。著者は、名著『縮み』志向の日本人』を書かれた人で、日本文化・韓国文化を比較しながらの明晰な分析を得意とします。

B 驚きだったのは、ジャンケンで遊ぶのは、日本だけではなく、韓国、中国もだということでした。

日本人はつい、「日本対ヨーロッパ」とか「日本対アメリカ」みたいな図式で考えがちなのですが、日本は当然ながら東アジアの一員なのです。

著者は、「ジャンケン」を、欧米のコイン投げ(トッシング・コイン)の二項対立の文化に対して、積極的な三すくみの文化であると位置づけます。

勝つか負けるかという白・黒の文化ではなく、相互に勝ち負けが動くジャンケンのシステムは、現代のどんづまりを切り開く21世紀の可能性だと言うのです。

欧米の二項対立は、文化すべてに浸透していると著者は言います。白か黒かを明確に決めなければいけない文化は、相対立する二つのものを同時に含むことが苦手です。

刺激的で面白い例がたくさんあるのですが、C、「エレベーター」。これは「上げる(elevate)」という英語の動詞か

ら生まれた言葉です。つまり、「昇る」ほうしか描写してないのです。フランス語もドイツ語も同じです。が、日本は「昇降機」と訳したのです。D 「昇り」と「降り」をちゃんとひとつの言葉に入れたのです。中国語も同じ発想だそうです。

どこを取っても刺激的な本です。「ジャンケン」に^⑤こんな可能性があったのかと、ハッとします。

コインでなくジャンケンを選ぶことは、「物から人へ、実体から関係へ、択一から並存へ、序列性から共時性へ、極端から^⑥両端不落の中間のグレイ・ゾーンに視線を換えると、暗い文明の洞穴の迷路から、なにか、かすかな光が見えてくる。エレベーターの二項対立コードが昇降機の相互、融合のコードに変わっていく兆しだ」と著者は書きます。

⑥。

〔鴻上尚史『世間ってなんだ』による〕

*三すくみ Ⅱ 三つの者が互いに得意な相手と苦手な相手を一つずつ持つことで、三者とも身動きが取れなくなる状態のこと。

問一 ①「イギリス人をはじめとするヨーロッパ人は、ジャンケンをしなないのです」とありますが、その理由として最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア 明確に主張する方が、自分の説得力を試すことができるから。

イ 何かを決める時に、たまたまの出来事に任せたくないから。

ウ ヨーロッパ人には日本人の精神構造がよく理解できないから。

エ あらゆる物事を全て偶然に任せるのはよくないことだから。

問二 次の一文が本文中よりぬけています。【ア】〜【エ】のどこにもどせばよいですか。記号で答えなさい。

つまりは子供心に、「競争」と「自己主張」が刷り込まれるのです。

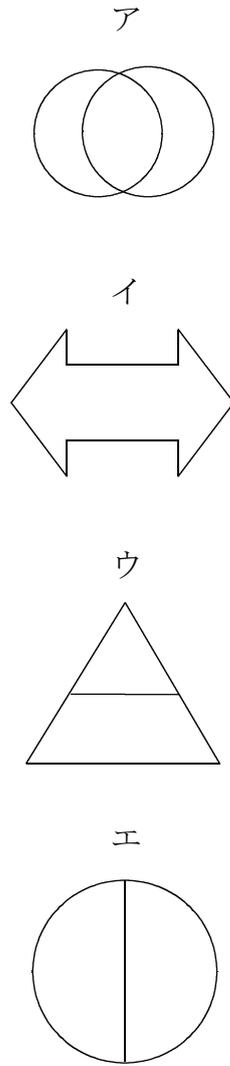
問三 ② 「これ」とはどのようなことを指していますか、本文中の語句を用いて四十字以内で説明しなさい。

問四 ③ 「ジャンケンでブランコに乗る順番を決める文化」とありますが、言いかえにあたる表現を本文中より十二字でぬき出しなさい。

問五 A D に入る語として最も適するものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ ところが ウ 例えば エ さらに オ ます

問六 ④ 「白か黒かを明確に決めなければいけない文化」が苦手とすることを表している図として、最も適するものを選び、記号で答えなさい。



問七 ⑤ 「こんな可能性」とはどのような可能性ですか、本文中より二十一字でぬき出しなさい。

問八 ⑥ にあてはまる一文として最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア ジャンケンという優れた文化を持つ東アジアの国々は、その可能性を追求すべきだと著者は言うのです

イ ジャンケンは日本独自の文化だが、今後はコインの文化も取り入れていくべきだと筆者は言うのです

ウ ジャンケン文化を取り入れないヨーロッパ人は、早くコインの文化を捨てるべきだと筆者は言うのです

エ ジャンケンとコインはどちらが良い・悪いということではなく、両方を尊重すべきだと筆者は言うのです

問九 本文中で筆者が述べていることの説明として最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア 日本人はまず議論をし、決まらない場合にはジャンケンをする。

イ ヨーロッパ人は、子どもの頃から対立することに慣れている。

ウ コイン投げ(トッシング・コイン)は、三すくみの文化である。

エ ジャンケンは勝者と敗者を分ける時に非常に有効な手段である。

問十 本文中で筆者がしている工夫としてあてはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本の文化と海外の文化を比べることで、よりわかりやすく説明している。

イ 「エレベーター」のような身近な例を出すことで、伝わりやすくしている。

ウ 自らの体験談を語ることで、自分の主張により説得力を出そうとしている。

エ 他者の著書を紹介し、自分と違う意見にも触れることで深みを出している。

二、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。(本文には一部改めたところがあります)

翌朝、目覚まし時計に先を越されてしまった。

この間もそうだったので、だいぶ疲れているのかもしれない。

そんな風に思いつつ、メールを確認しようとぼんやりした頭で携帯電話を見て、気づく。

「……あれ？ まだ起きる時間じゃない？」

携帯電話のデジタル時計と、目覚まし時計とを見比べる。

目覚まし時計の針が、携帯電話よりも早い時間を示していた。

「なんだ……進んでたのかあ」

ちよいちよい、と目覚まし時計の背中をいじって、正確な時間に合わせる。しかし、一日でズレたのだろうか。いや、ちよつとズレていたことに気づかなかったのかも。

「ん。これでよし」

五分ほど早く起こされたので、起床予定時刻まで布団でまどろもうかとも考えたのだが、せっかくなので出勤の支度を始めることにした。少し早く家を出る。

外に出れば、昨日、一日中降り続いていた雨は上がっていた。珍しく雲に切れ目ができて、青空が覗いている。余裕があるため朝のおいしい空気もじっくり吸えて、気分がいい。

……今日は、何かいいことがあるかもしれないな。

そんな予感が、心と身体に満ちているような気がした。気のせいかもしれないけれど。でも、確か、昨日読んだ『サラダ記念日』にも、そんな一文があったはず。『よく進む時計を正しくした朝は』……ええと、続きは……そうだ。『何の予感か我に満ちくる』^①だ。朝だからだろうか、頭が冴えている気がする。

さて、五分早く家を出たことによつて、いつもよりも一本早い電車に乗ることができた。

そのおかげで、十五分ほど早くしろはね図書館の最寄り駅へと着いてしまった。

実際には電車のタイミングが合っただけのことなのだが、^②分が^③分に増えた気がして得した気分になった。『早起きは

三文の得』って言うし、『時は金なり』とも言うし。

そんなことを考えながら、^Aと図書館を目指していた時だった。

「あ」

図書館の門で、^{なぎほら}風原さんに^B会った。

「お、おはようございます！」

「……おはようございます」

風原さんが、相変わらずの寝癖顔のまま、血圧の低そうな声で応えた。

しかし……どうしよう。何を話したらいいんだろう。

「こ……こんなところで会うなんて、奇遇ですね」

「……職場ですけど」

「で、ですよね……」

全然、奇遇でも何でもなかった。^④だ。

「ええと、お、お早いですね。いつもこの時間に？」

「……はい」

沈黙。

会話が續かない……一体どうしろというのか。

と、その時、ひらひらと一羽のアゲハチョウが飛んできた。

黄色に黒いライン、赤と青の差し色が入った姿を見て、もうそんな季節なのかあ……など思っていると、そのアゲハチョウが風原さんの肩に止まった。

「あ、チェックのシャツに夏の蝶」

「……え？」

思わず口になると、風原さんが怪訝そうな顔になる。

「あ……えっと、サラダ記念日。昨日、読んだんです。それに、そんな短歌が……確か、『ハンカチを取り出す君の綿シャツのチェックに夏の蝶が来ている』」

風原さんのシャツの柄に、アゲハチョウ。それを見て、昨晚、本を読んで感じた情景を思い出したのである。これも爽やかな空気が印象的だったので覚えていられたのだろう、思わず口にしてしまった。

いやでも、読んだ本のこととか、なんで言っちゃったんだろうと後悔した。そんな話を振られたって、風原さんも困るだろうし――

「七月六日」

「え？」

「……サラダ記念日ですよ。『この味がいいね』と君が言ったから』」

「『七月六日はサラダ記念日』……」

風原さんが口にした短歌に、憶えていたその言葉を思わず続けてから、Cした。

「えっ！ 風原さんも読まれたことあるんですか!?」
興奮して風原さんに尋ねる。

その声に驚いたのか、風原さんの肩からアゲハチョウが、D、と飛び立っていった。

⑤ 風原さんは目をぱちくりさせながら、

「……ありますよ。時代を作ったような名著ですし」

「へえ、そうなんですね……あつ、風原さんはいつ読まれたんですか？」

「確か、小学生くらいの頃です」

「えっ、早い！ つていうか、そんな前からある本なんですね、あれ。あんまり共感できるから、もっと最近のものかと」

「もう三十年くらい前に出版された本のはずです。発行年、奥付おくづけに書いてありますよ」

「おくづけ、ですか？」

「……本の後ろの方、あとがきとかのあとにあるページです。著者略歴とか載のってる」

「あつ……すみません、そこ、読まなかったの……」

あとがきまでで全部読んだつもりになっていた。そうか、そこに情報があったのか……

「他にも版数——どれだけ刷られたのかとか、出版社の連絡先れんらくさきとか、そういった情報が奥付には書いてあります」

「なるほど、そうだったんですね。今度からはそこチェックしてみます。あの、風原さん、本は結構読まれるんですか？」

「まあ、そこそこは……好きですし」

「そうですね。私、これまでまったく本を読んでこなかったんですよ。だから、何を読んだらいいのか分からなくて、早坂さんに聞いた『サラダ記念日』を読んだんですけど、⑥、なんか読書っていいなって思っ

そこまで話して、はっとした。

……喋りすぎた。

同じ感動を有した人だと思った瞬間、⑦ 相手が風原さんだということ忘れてしまった。

「えっと……すみません」

「……いえ」

気まずい空気が流れる。

ああ、なんてことだ……恥はずかしいことを……

どうしよう、図書館の入口まで、まだ少し距離きょりがあるのだが――

「……『星の王子さま』は読まれましたか」

その時、そよ風のような小さな声で、風原さんが言った。

「い、いえ」

「それも読みやすい本ですので……しろはね図書館にもありますし、よろしければ」

「あ……は、はい！ 読みます！ 読んでみますね！」

びっくりした。^⑨ 風原さんが本を薦すすめてくれるとは。全然喋ったことないのに。

偶然早坂さんにも薦められていた本だし、これは読まなければならないと思う。休憩時間きゅうけいになったら、真っ先に図書館内で探してみよう。

そこからは、お互たがいにまた無言だった。

けれど、先ほどまでの居心地いこちの悪さは、気持ちのいい風に吹ふかれて飛んでいったように薄うすらいでいた。隣となり合ったまま、図書館の入口を目指して歩く……しかし、話せないと思っていた人と話ぐできただけで、こんなに気持ち軽くなるとは。

〔三萩せんや『図書館ホスピタル』による〕

問一 ① 「何の予感」とありますが、ここではどのような予感なのか本文中の語句を用いて二十五字以内で説明しなさい。

問二 ②・③ にあてはまる数字として適するものを本文中よりそれぞれぬき出しなさい。

問三 A D にあてはまる語として最も適するものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア はつと イ ばつたり ウ うきうき エ ひらり

問四 ④にあてはまる語として最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア 突然^{とらげん} イ 偶然 ウ 必然 エ 天然

問五 アゲハチョウの姿を表現している部分を本文中より二十五字以内で探し、はじめと終わりの三字をぬき出しなさい。

問六 ⑤「風原さんは目をぱちくりさせながら」からわかる、風原さんの心情として最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア 『サラダ記念日』を読んだことがあることに対して驚く「私」にあきれている。

イ 会話の途中^{とちゆう}で、急に大きな声を出した「私」に対してひどく驚いている。

ウ 肩に止まっていた蝶が、飛び立ったことに対して「私」を非難している。

エ 思わず『サラダ記念日』について知ったかぶりをしたことに対して動揺^{どうよく}している。

問七 ⑥「なんか読書についていいなって思って」とありますが、「私」は読書のどのようなところを良いと感じていますか。あてはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本の感想を人と共有する楽しみがあるところ。

イ 自分の頭が良くなったと実感できるところ。

ウ 出版されて時間が経^たっている本でも共感できるところ。

エ 何か起こった時に前向きにとらえることができるところ。

問八 ⑦「相手が風原さんだということ」とありますが、「私」にとって風原さんはどのような存在ですか。本文中より十一字でぬき出しなさい。

問九 ⑧「恥ずかしいこと」とありますが、これは具体的にどのようなことですか。本文中の言葉を用いて二十字以内で説明しなさい。

問十 ⑨「風原さんが本を薦めてくれるとは」とありますが、なぜ風原さんは本を薦めてくれたのですか。その理由として最も適するものを選び、記号で答えなさい。

ア あまりにも本を読んでいない「私」が図書館で働くことを心配し、本について学ぶべきだと考えたから。
 イ 図書館で働く以上、自分の働いている図書館にある本は全て読んでおくべきだと考えているから。
 ウ 読書の楽しみに気づき始めた「私」を好ましく感じ、より多く読書をしてもらおうと考えたから。
 エ 朝は静かに過ごしたいと思っっているので、「私」にこれ以上話しかけられないようにしようと考えたから。

三、次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～④の慣用句の□にあてはまる漢数字一字を、それぞれ答えなさい。

- ① 石の上にも□年 ② 親の光は□光 ③ 無くて□くせ ④ □足のわらじをはく

問二 次の①～④の熟語が対義語の関係になるように、□にあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- ① 私用 ↑ ↓ □用 ② 悲劇 ↑ ↓ □劇 ③ 増加 ↑ ↓ □少 ④ 感情 ↑ ↓ □性

問三 次の①～④の文の□部分がかかっているところを、各文の——線部より一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 心を□込めて君に手紙を□書く。
 ② □こは□私の□兄が□通う□学校です。
 ③ □とても□美しい□花を□部屋に□飾る。
 ④ □昨日□お店で□買った□本を□読む。

問四 次の①と④の文の——線部の漢字をひらがなに直しなさい。

- ① 読む価値のある本。 ② 言いたいことを強調する。 ③ 人生の節目をむかえる。 ④ 友達を許す。

問五 次の①と④の文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。必要ならば、送りがなをひらがなで書きなさい。

- ① 科学技術のハッタツ。 ② ツミをつぐなう。 ③ エイエンの平和を願う。 ④ 先頭集団をミウシナウ。